

渡辺克己著



第七章●中島かいわい

## 第七章 ● 中島かいわい

【写真】 大正初年の弁天島

(大分川口)

- |          |         |
|----------|---------|
| ・タヌキの巣   | ・エビ茶に白線 |
| ・ハゼ山物語り  | ・住宅地の誕生 |
| ・酒一升・畑一畝 | ・通らなかつた |
| ・たたった松の木 | 電車      |
| ・チクタン坊主  | ・中島校騒動  |
| ・中島全部が   | ・消えた    |
| 一万円      | グラウンド   |

奥付け／デジタルブックについて



### 発行に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37 (1962) 年 11 月から翌 38 (1963) 年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58 (1983) 年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8 (1962～63) 年当時のことです。▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58 (1983) 年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



大正初年の弁天島（大分川口）

## タヌキの巢

「畑と小川と湿地帯。家など一軒だつてありはしなかった」  
中島を語るとき、最初のことばはだれも同じだ。

畑と小川と湿地帯…それはつい近年まで変わらなかつた。中年以上の人の記憶によみがえる中島は、それ以外になにもない。

明治時代の姿は、いまの舞鶴橋のちよつと下あたりから大分川の土手がきれて、そこから中島にアシのはえた川が入りこんでいた。「川」というよりそれは洪水のとき本流からあふれ出た水が中島地帯になだれ込んでくる水路とでもいった方がいいかもしれない。

日ごろは水がわずかに残っているミゾと、アシのはえた湿地帯が深く入りこみ、それは畑の間を幾筋にも分かれて海にそそいでいる。潮が満ちてくると流れが逆になって、それらの湿地帯に潮の香をしみこませていく。

その潮に乗ってハゼが入りこんできた。ハゼ釣りの季節になると、おとなも子どもも、中島一帯のミゾからミゾへ、ハゼをさぐって釣りざおをふり回した。

だいたい「中島」という地名は、府内城のうしろのごく一部。東西は福寿院のちよつと東寄りにある橋のところから電車道まで。南北は裁判所通り(この通りは小川が流れている湿地帯だった)から体育館の裏の通りまで。それから先は「中島通」と呼んでいたのである。

さらにいま弁天といわれる地区は「弁天島」と呼ばれる島だった。明治時代は豊河原とも呼んでいた。

潮がはいってくるとちよつと渡れない広い湿地帯が大分川と住吉川口をつないで島をへだてていたのである。こどもたちが潮の引いたあとに残った池や、アシの間の流れに群れているゴリをすくいに、深いアシをザワザワかきわけて走り回るほかは、大分の町の人々にはまったく用のない地帯だった。

このような深いアシや、つる草のからんだヤブにウサギやキツネがすんでいたという。

いまの松栄神社のところは、寛永十八（一六四一）年時の城主日根野吉明が北の丸に隠居所として築いたところで、樹木の間に遊亭を作り、築山や泉水などをしつらえ、「山里」と名付けていた。

しかし、明治ごろにはすっかり荒れて、三方を堀にかこまれた不気味な一角となり（堀はその北側から深く入り込んでいまの浄安寺からカギなりに県医師会館のところまで堀の中だった）実際にタヌキやキツネが住んでいたという。ここでさえそれだから、中島裏一帯のもようは、およそ想像がつこうというものだ。

この「山里」の客亭には広瀬淡窓が藩主に招かれ藩学校の講師となつて滞在したことがある。ここから中島裏方面をながめ「府内即時」と題する次のような意味の詩を書いている。

海水は堀に通じ

潮が来れば水も入れかわつて美しい

短刀をさした人が網をさげってくる

武士でも漁師のまねをする。

## ハゼ山物語り

中島一带はクワ畑がたくさんあったが、またハゼの木がいたるところに植わっていた。秋になるとハゼの木が一面に紅葉した。大分川と住吉川によって作りあげたこのデルタ地帯の砂質に、枯れ葉を落としたクワの木をすかして、秋の日がしらじらと反射し、湿地帯の枯れアシを渡ってくる風にゆらぐ、ハゼの木の紅葉がひときわ美しくはえた。

明治大正のころまでは、だから中島一望「ハゼ山」とも呼んでいた。いや「ハゼ山」の呼び名は、もっと遠い昔からかもしれない。

府内藩（大給時代）は藩の収入源として領内のハゼの生産を直営事業として管理し、その植樹を奨励していた。いうまでもなくハゼの実からロウ（蠟）を製造するのだから、当時としては重要な産業である。

領民はハゼの植わった山林を「御用ハゼ山」と呼んだ。そして山の手入れから、実の収穫までは町人が請け負っていたもので「御用御ハゼ山手入れつかまつり、ずいぶん木を養い……」といったような請け負い願書を細工町の伊兵衛という人が提出している。

その「御用ハゼ山」は、内成山、高崎山、駄ノ原山、白木山、中島裏・坊ヶ小路などだった。寛政九年（一七九七年）に中島裏に植えてあったハゼの一部を西応寺わき南土手、仙石橋東土手などに植え替えたという記録もある。あの辺までハゼを植え広げていたわけだ。つまり中島一带のハゼの木は藩政時代に藩

の直営事業として植えさせたもので、いわばハゼの木を植える以外には中島裏は使い道のない荒地だったわけでもある。

これらの記録からみると、府内の人が中島裏を「ハゼ山」と呼んだのは、そのころからと考えてよいようだ。もう一つ、中島の一部に新田を開いた記録もある。

塩九升町にも新田を作っているが、享保十年（一七二五年）に天神島に金助田と呼ぶ新田を開発したというのである。最初今津留の金助という人が許可を得て開発したのでこう呼んだということ、のちには今津留の農民全部と塩九升町の一部の人もこの新田経営に参加している。天神島は、中島の大分川土堤寄りの五条から十条あたりにかけての一带である。記録に「新田を開発するため、潮止めの土手は中島船通し付近から二百間を築いた」とある。「中島船通し」は住吉川の川口付近から大分川に抜けて舟を通した支流と考えられる。

## 酒一升・畑一畝

明治時代、浜町かいわいのこどもは、夏はつぶしまで届くような白い着物を一枚はおっていた。ボタンはなくて前はあけっぱなし、走ると後ろにひらひらとひるがえるといういたって簡単なシャツのようなものだった。これに大きなポケットを付けてもらっていたから便利はよかった。これをひらつかせおへんに初夏の日をはねかえしながら仲間とつれだつて中島裏のクワの実をとりに行った。

クワの実は熟してくるとしだいに赤くなり、さらに黒ずんで

くる。赤いうちはまだ堅くて甘みはないが黒くなると甘みが出て、指で軽くつまんでも赤い汁がにじんだ。

こどもたちは、クワの葉の間からのぞいた黒い実をみつけてしてさんざん食べ、歯も口のまわりも赤く染める。食べあきるとポケットにつめこんだ。ポケットがいっぱいになったころには、白いシャツはつぶれたクワの実でまっ赤に染まっていた。もちろん帰宅して母親に尻をひっぱたかれた。工藤虎彦さん（大分タクシー社長）の思い出話である。

中島裏の思い出はこんなたわいもないことしかない。なにしろサツマ芋を植えてもよくできない荒地だ。そのうえちよつと大きい雨が降ると水びたしになるのだから、中島裏の土地など買うのは「ゼニを捨てるようなもの」だと敬遠されていたのだ。住宅を建てるなど思いも及ばないことだった。明治の末ごろの話だが、酒一升と中島裏の畑一畝（約一アール）を交換してもまだ損だといったという。夢のようなほんとの話だ。

明治年代にたばこ販売で財を築いたといわれる船頭町の笠木文蔵さんが、中島裏の中心一帯の広大な土地を坪五十銭ぐらいで買った。

「あげなひどい土地を坪五十銭も出して買って、どげえするんじやろうか。文蔵さんは、だまされたんじゃ」と人々はうわさをした。この、おもわく買いが当たつてのちに大地主となったが、文蔵さん自身もそのときはだまされたと思ったかもしれない。

大正七年に西新町の後藤守一さんがやはりすすめられて坪六円で宅地にするぐらい買った。それからしばらくして洪水が

あったが、水が引いたあと行ってみたら、ハゼの木のてっぺんにゴミが引つかかっていた。それは持っていたコウモリがさを高く差し上げて届かないぐらいの高さだった。「こんなところに家を建てたら命がけだ」

とすっかりおじけついてしまった。しかし、そのころから好況の波に押しあげられて地価もだんだん高くなり、中島裏の荒地に目をつける人もしだいに多くなっていった。だが中島裏が住宅地として適地になるのは相当のちのことである。

## たたった松の木

どうやら中島裏に夜明けがおとずれかけたのは大正十年前後からだ。

大正九年に県立公会堂を県庁（府内城）の西門外に建てることになったさい、家老屋敷の所有者太田信昌さんが、その屋敷そっくり提供し、自分は中島裏に家を建てて引越した。当時の岩田女学校の裏の川をへだてて向こう、いまの中島四条一目、安部万太郎さんの住んでいるあたりであった。それが皮切りになって、ああたりに二、三軒の住宅が建った。中島裏に住宅を建てた草分けといってもよい。

話がわきにそれるが、太田信昌さんが県立公会堂用地に屋敷を売り渡した後日談がある。公会堂を建てたとき、前の道路を広げるため、屋敷の一部を市道に提供した。ところが道路になったところが庭園の一部だったので大きな松の木が立っていた。市では道路のまん中に松の木があってはじゃまになるとい

で、これを競売にすると告示した。すると、これを知った太田信昌さんは激怒したのである。

「オレは公会堂のために屋敷を提供したのだ。その屋敷内の松の木がじゃまになるからといって、市がことわりなしに競売にするとはいふつごう千万だ。市がそんな考えならオレが落札する」

当時としては、まあ四、五円以内だろうという松の木を二十円で落札した。そして「オレの所有物だ。だれの自由にもさせん」と、そのまま放置しておいた。市は売り渡した以上は、これをどうすることもできなくなった。しかし、道路のまん中につっ立った松の木は、当時としては、べつだんじゃまにもならず、いつか「公会堂前の松の木」と市民になじまれるようになった。

戦後、公会堂が県会議事堂に変わっても、その松の木は高くそびえていた。手入れもされず、根元を自動車などが走りまわるので、松自身がいたたまれなくなったのか、しだいに枯れかかっていた。そこで三十四年に県議会の付属建て物を新築するさいようやく切り倒した。もうやかましくいう太田信昌さんもあの世の人なので、文句をいう人はなかった。しかしこの話にはまだ続編がある。

松の木の所有者は県でも市でもなかったから、あとのことは知らないというのか、切り株は放置されたまま道路のまん中にならなくても根を張っていたのである。夜間など通行人がつまずいて困っていた。

二年後の三十六年五月に、大分合同新聞の「道路への注文」

欄に、たまりかねた読者から「どうかしろ」と投書があつて、あわてて市が掘り起こし、問題の松はすっかり影を消した。太田信昌さんの怒りが長くたたつたものである。

## チクタン坊主

明治二十六年に大洪水があつて大分町をはじめ近郷は大被害を受けた細かな記録があるが、それには中島裏一帯のことは一行も出ていない。荒地だったので問題外だったのでだろう。

大正になつてから四年と七年にまた洪水があつた。このとき洪水で大分川の土手が切れたのは、二度とも坊ヶ小路付近だった。ここからどつと流れこんだ水は、県立女子師範学校（いまの長浜小学校）の東の方の低地を通り、いまの舞鶴町県宮アパートのあたりから日銀社宅、さらにいまの循環道路付近を中心にして中島裏一帯を水底に沈めてしまった。おりからの高潮とかちあつたので、なお被害は大きくなつた。

このとき、いま県の部長、課長級の公舎のある付近に農家が数軒あつたが、これが屋根だけみせていまにも流されんばかり。お百姓さんは屋根に上がつて「助けてくれ」と泣き叫んでいた。これを県庁から舟をこぎだして助けて回つた。中島裏一帯は低湿地帯だ。その上大分川の土手が切れてなだれこむ水勢がもろにぶつかつてくる方向に中島裏があつたわけだ。またこの水害のさい、北東の風に吹き寄せられたゴミが、当時の岩田女学校の裏の川と、その一帯の低地に山のように積みあげられた。水害後悪臭を放つこのゴミを片づけるのも大仕事だったのである。

こんな危険な土地に家を建てて住むことはまさに大冒険であったわけだ。だから太田信昌さんらが、大正九年に中島裏に家を新築したさいは、石がきを築いて土地を高くしていたようで、いまもその付近一帯は、他よりも一段高くなっている。

大正十年に新川で九州沖繩八県連合共進会が盛大に開かれたあと、当時の大分商業学校運動場の裏付近に県営住宅が建った。共進会の会場を解体したとき、その廃材を利用して建てたものである。この県営住宅群は太田信昌さんらに次ぐ中島裏進出住宅とみてよい。

こうして中島裏には、南の方から水がしみこむように少しずつ一般住宅がはいりこんでいったが、奥の方はまだまだ家を建てようという勇氣のある者はいなかった。

弁天近くでは冬になるとカモ猟をする鉄砲の音がひびき、春はツクシが一面に頭を出し、ヒバリがわがもの顔にさえすった。いまの九、十条の東部付近はチクタンと呼ばれる地帯で、そこにあつたチクタン池は、昼でもおバケが出そうな薄気味悪さをたたえていた。いや、こどもたちは「チクタン坊主」というおバケが出るといって、近づかなかつた。

とにかく大正十一年までは中島裏は大分市ではなかつたのだからむりもない。

## 中島全部が一万円

大正十一年に中島裏がやっと大分市に編入されたのだが、中島裏をいまの町に当てはめると、裁判所通り（中島四条）をまっ

すぐに四条一丁目の橋まで引いた線と、このミヅにそって北に行き、旧県庁（府内城）東側を流れるミヅを境とし、昭和通りを舞鶴橋までまっすぐに引いた線。以上の線から北方弁天までの中島一帯がだいたい中島裏といわれた地帯で、古地図をみると津留という地名を書いてある。

ずっと東大分村の管轄にはいつていたもので、大分市の中心部に食いこんでいる地帯でありながら、まったく無視されていたわけだ。東大分村にしても、クワとハゼの木と、できの悪いイモ畑、そして湿地帯のまったくの荒ぶ地、さらに水害危険地帯である川の向こう側の土地だ。どうでもよかったにちがいない。いわばこのデルタ地帯はだれから見捨てられた孤児だったのだ。

しかしこの孤児にも日の当たるときが徐々におとずれてきた。おいおい大分市民によつて中島裏の土地の売買もされ始めてきたし、市の膨張につれて住宅も点々と建つてくると、大分市としても無視できなくなった。ようやく大正十一年四月一日、東大分村との交渉ができて大分川からこちらを大分市に編入した。このとき東大分村に報償金という名目で支払った金は一万円。まあ東大分村としては一万円で中島裏を大分市に売り払ったようなもの。

ついでに大分市の合併の歩みを記しておこう。

明治十七年に県内の行政区画の再編成をしたときの記録には、大分郡大分町はほとんど府内城の城下町の範囲だけで、隣接して勢家町、生石村、永興村、古国府村、今津留村、萩原村、日岡村、滝尾村などがあった。その前上野村は大分町にしばらく

く合併されていたが、市街地と村落は人情風俗を異にし、なにかと歩調が合わないという理由で分離し古国府村に加わった。

明治二十一年に勢家町は生石村を合わせて西大分町に、今津留村はこれも周辺と合併して東大分村となったが、大分町はそのまま。

日露大戦で、日本が世界の一流国にのし上がったが、国内整備のため、自治体に大きな負担がかかってきた。これに応ずるには町村を合併して資力の充実をはからねばならない。ということで全国的に合併が促進された。大分町も明治四十年に西大分町、荏隈村、豊府村を合併した。これで市の資格ができた明治四十四年に市制が施行された。

くだって昭和十四年に八幡村、東大分村、滝尾村の三村、十八年に日岡村がようやく大分市に合併している。

桃園地区や、庄ノ原の一部などが編入されたのは昭和三十年のこと。

## エビ茶に白線

旧中島（現在の二、三条一丁目付近）は岩田高等女学校卒業生には忘れられない土地。

いまの大分地方裁判所一帯が岩田高女の広い校地だったが、戦災で焼失して大分川の向こうへ引っ越したのである。

岩田学園の創立は明治三十三年。最初「大分裁縫伝習所」の名で中島にささやかな校舎を建てて出発した。創立者岩田英子さんの実家は中上市町の旧家で、代々庄屋をしていた。英子さ

んのおとうさん久之助は堀川の素封家酢屋の五男で、岩田家の養子となった人。英子さんはこの両親に幼いとき死別し、しかも二十三歳で未亡人になるなど家庭的には恵まれない人だった。髪を短く切り、まゆを落とした若い未亡人は、家を妹のキクさん夫婦に継がし生涯を教育にささげる決心をしたのである。学校の設立、経営には妹キクさんの夫浩さん（現校長のおとうさん）が陰の援助者として非常な努力をし、英子さんの目的を貫かせたという。

創立の翌年には「大分裁縫学校」と改称、大正年代には「岩田女学校」と「岩田実科高等女学校」と二つの名前を持つ学校になり、名を変えることに大きく発展していった。白線のはいつたエビ茶のはかまは岩田の生徒の象徴。

大正十年に堀川の一部が埋め立てられたとき、岩田高女の裏のドブ川と湿地も埋められ、いまの家庭裁判所や税務署一円にわたる広い運動場を造成したが、昭和の初めの中島耕地整理で運動場と校舎を道路で断ち切られてしまった。



岩田女学校（挿絵：田中 昇）

いまの弓道場の建て物や武徳殿は大正の初めに建てかえられたものだが、そのさい古い建て物を岩田高女が買収して校舎増築などに使っている。その建て物は由緒のあるものではなかったかと思われる。

府内藩が慶応元年に遊焉館という藩立の修学所を中島に建て、子弟を寄宿させて教育に努めたが、その位置がどこであったか郷土史家も断定しかねている。あるいは旧武徳殿がそれであったかもしれないのだ。

松栄神社前の一角は、明治の初めに黒住教の教会所を森下権令が建てたところで、その後荒廃していたことは「昭和通りかいわい」のさい書いたが、大正年代には犬塚病院があの一帯を占めていた。現在の松栄神社の横の道は、そのとき犬塚院長が堀の跡を買収して埋め立て、道路にして市に寄贈したものである。それまでは松栄神社の境内にはいる道しかなかった。

## 住宅地の誕生

中島地区が、いまのように整然として碁盤の目型の道路を持ち、住宅街として新しく出発したのは昭和になつてからだ。

大正の末ごろから耕地整理をしようという計画をたてていたらしく、大正十五年発行の大分市街地図をみると中島裏は空白地帯に変わりはないが、白紙の上に、いまの道路網とほとんど変わらない予想道路線がひかれている。

この耕地整理は、中島裏一帯の地主が耕地整理組合を結成して、荒廢地をよみがえらせたもので、耕地整理というより事実

上の区画整理だった。今日の中島の発展は、このとき基礎ができたのである。

江藤澄登さんが組合長となり勸業銀行から三十万円を十八年の年賦償還で借りて昭和元年ごろから着手、昭和三年に完成して還地交付を終わった。

なにしろおはなしにならない条件の悪い土地に大きな組合費を負担して整理をしてみても、いつもものになるものか見当もつかないのだから、いろいろと苦情も多かった。それに組合費を出したうえに自分の土地が道路に食われて半減したり、岩田高女のように校舎と運動場がはなればなれになるといった不合理も出たりで、もめたこともあったが、とにかくあれだけのことを行断して将来への基礎を固めたのはいまから考えとたいした事業だった。

それにしてもあのハゼの木とクワとイモ畑のただっぴろい荒地に白々と広い道路が交錯し、カラスの群れがわがもの顔に遊んでいる風景は異様でもあった。

もつとも整理されたのは、中島十条から南の方で、それから向こうは沼地や砂地。さらにその先は住吉川口付近から入り江のようになって満潮時には潮がはいりこむ低地が横たわり、弁天島をへだてていた。ちよつと手のつけられない地帯だった。

しかし、この地帯ものちに一応の区画を作って「松露通」「高砂通り」「明石通り」などの名をつけていた。

この潮のはいりこむ低地帯を買って、せつせと埋め立てを始めた人があった。船頭町の笠木文蔵さんで「あげなところを埋め立ててどうするつもりじゃろうか」と、周囲の人は変わり者

の道楽ぐらいにしか見なかった。だが長い年月をかけて埋め立てたとき、その土地は有望な工場地帯の折り紙をつけられて、大分市民をびっくりさせた。大分市が弁天海岸一帯六万七千余坪を買いあげ、日本人造羊毛工場（社長は金光庸夫さん）に無償で提供して誘致しようというのだ。

昭和九年一月、大分市議会も承認し土地所有者の笠木文蔵さんと交渉を始めたが、坪当たり三円五十銭と三円の開きで折り合わず、さらに漁業権問題もからんでさんさんもめたあげく、笠木さんらが譲歩して解決した。翌年から工場誘致にかかり十一年から操業した。従業員千三百人の大工場だから大分市としては鼻高々だった。

### 通らなかつた電車

中島の耕地整理が事実上は区画整理だったことは前に書いたとおりで、住宅街の形態がこれだととのったわけだ。しかしまだ人家もない畑の中にただっぴろい街路だけが行儀よく横たわっているのは妙なものだった。

ペンペン草のはえるにまかせた道路をみて「なんてムダなこととを」と悪口をたたく者も多かった。農道というにはあまりに広い。将来の住宅街の道路にしても、これまでの繁華な街路よりも広い感じだ。だいたい人が住んでおのずから道ができるのがこれまでの道路の通念だ。…いま考えるとおかしなことだが、とにかくそのような常識をはずれた中島地区の姿には市民はちよつとあきれ顔だったのだ。

しかもこれに一条、二条としゃれた町名までついた。こいつはこっけいな感じさえしたものだ、いまのようにびっしり人家が建ち並んでみると、少しも不自然ではなく、その町名がイタについている。

ところが、この町名は、戦後の都市計画で少々混乱を呈してきた。一条というのは昭和通りだが、いまここを中島一条と考える者はいない。もともと一条から四条ぐらいまでは耕地整理以前から町名はあったのだから、よけいややこしい。お城から西の方は荷揚町に属している古い町だし、市の発展につれて東の方は城崎、大分川近くは舞鶴と呼んでいたのだ。

たとえば、城崎を人から尋ねられると「この道は昭和通りですが、また中島一条で、東の方をはいったところは中島二条、三条です。そしてそのあたり一帯を城崎とも呼んでいます。その先が舞鶴ですが、舞鶴の中にも城崎県営住宅があります」なんともややこしいが、そういうことになるのだ。

この中島に分不相応？な広い舗装道路があり、しかも人道と車道に区別され、人道には敷き石までほどこされている。これを「循環道路」と称している。いまはずこしも不思議に感じられないが、できた当座はびつくりさせられた。

ここは電車を通したいという、電鉄会社からの申し入れによつて耕地整理のさいとくに幅員八間余という大きな道路をとつたものである。電車は中島十条から長浜神社横を通り、さらに塩九升、東新町を抜け、盲学校の北側あたりを回つて大分駅前につながる予定だったようだが、とりやめになった。

「電車を通すというからこんな広い道をムリして作ったのだ。

この損害をどうしてくれる」と耕地整理組合はカンカンになった。そこで電鉄会社は代償として三万六千円を寄付した。その金で昭和十一年の春から二年かかって、すぐくりつばなアスファルト舗装と敷き石の人道を完成したわけだ。まるでしこめが厚化粧をしたようなものだったが、これで中島住宅街のぬうちがピンとはねあがったのはいうまでもない。

## 中島校騒動

中島の耕地整理に着手する前、大正十三年に中島小学校が開校した。畑のまん中にぼつんと建った校舎は、まるで中島地区住宅街造成の先兵のようなたたずまいだった。校庭から弁天海岸まではさえぎるものもなく、沖の白い波頭が望めた。天気の良い日はその向こうに佐賀関のエントツが浮かんでいた。風の吹きようでは潮の香も教室に流れてきた。

中島裏が東大分村から大分市に編入されて二年後に、早くも学校ができたのだから、その進展ぶりは驚くばかりだ。

創立当時の児童数は五百六十一人。第一小学校（金池）や女子小学校（荷揚町）第二小学校（春日町）の一部が中島校に通学するようになったのだが、浜町、新川の児童が七割近くを占めていた。

この中島校が生まれるときがたいへんで、大道町側と学校の争奪戦を演じている。

最初三浦数平市長は就学児童数の増加にともない小学校増設の計画を立て大道方面に敷き地五千坪、普通教室三十の堂々た

る校舎を建てることを学務委員会に提案した。ところが市会議員として学務委員の一員だった太田信昌さん（中島居住）が猛烈に反対した。信昌さんは大道方面と中島方面の最近の児童増加率を具体的に示して当然中島に増設すべきだと一歩も引かない。そこで委員会は「それでは中島に学校予定地の腹案があるのか」ときた。そこまで信昌さんは考えていなかったかもしれないが「もちろんある」「じゃあすぐに視察に行こう」というわけで信昌さんについて委員連も市長も中島にやってきた。だっぴろい中島だ、どこを指さしても校地になる。結局市は大道案を撤回して中島方面へ建てるということになった。

さあ大道方面がそれではおさまらない。市長のふらふら腰をたたき直せというのでムシ口旗を押し立て大道町居住の市議員平松折次さんなどを先頭に市役所を取りまくという騒ぎ。これにたいして「大道側は横暴だ」とばかり浜町、新川方面がこれまた出身議員をかついで騒ぐというありさまで、すったもんだのすえ一校の敷き地予定五千坪を真つ二つに割って二千五百坪ずつ、普通教室二十の学校を両方に建てることでケリがついた。結局規模の小さな学校が二つできたわけで、その後たびたび校地、校舎の拡張をしなければならなかった。

こんな大騒動のすえだから校長も、双方見劣りのしない大物を置かないとおさまらないだろうというので、中島校に女子校（荷揚町）校長の矢野孝吉さん、大道校に南郡視学の辻英俊さんを迎えてすえた。

矢野孝吉さんはいまは故人となり、むすこの外生さんは去年まで精糖工業会専務理事をしていた。辻英俊さんは中島四条に

健在で、むすこの英武さんは先ごろ閉鎖した新光甜菜糖大分事業所長だった。両校のその後の設備充実は、町民が大いに氣勢をあげたあとだし競争意識も手伝っているから校長としては楽にやれたかもしれない。

## 消えたグラウンド

中島には大分市民に忘れられない場所が一つある。それは城崎グラウンドだ。

昭和五年ごろ市議員の間にスポーツ奨励のための市営グラウンドをつくろうという声があったことがある。野球にしても、その他のスポーツにしても興隆期だったから、ちゃんとした施設のあるグラウンドがほしいという市民の要望が市議員をつきあげていたのである。ところが議会までこの問題が持ちこまれたものの、当時の財界の不況や市の財政難などから、まあまあというので握りつぶされてしまった。

グラウンド建設が本格的になったのは昭和八年。最初は市と商工会議所が共同で建設しようといっていたのだが、やはり市は財政難を理由に直接乗りださず、グラウンド協会という民間団体をつくらせて寄付金によって建設をすすめた。準備委員長は市会議長の秦葵夫さん、寄付募集の実行委員には一丸伍兵衛さん（先代）など市議員や商工会議所関係者二十五人が当たった。

ところがグラウンド建設地に上野ヶ丘、弁天海岸、中島競馬場の三つの候補地があがった。中でも弁天海岸は熱心で地主の

笠木文蔵さんは敷き地を寄付しようとしてまでいい出したほどで、なかなか決定しなかったが、結局専門家に依頼して調査してもらった結果、中島競馬場に決定した。

中島競馬場は、大正十年に新川で九州沖繩八県連合共進会が開かれたさい、その敷き地内にあった競馬場を中島五条大分川寄り付近に移したものである。しかしここは施設もじゅうぶんでないのでほんの草競馬が催されていたぐらいのもので、いわば荒地地だった。これがグラウンド適地とされたわけだ。完成したのは昭和十年十月。完成と同時に市へ移管している。

このグラウンドは、野球、庭球をはじめバスケット、フットボール、陸上、相撲などの競技場があり「スタンドの収容力は四千二百人、ただし六千人までは収容可能」というりっぱなもので東九州一と豪語していた。野球場開きは南九州中等学校野球予選を完成の前年昭和九年七月に行なっている。

プールまで作る予定だったようだが、それより前にグラウンドそのものがだめになった。やがて戦争に突入してスポーツどころのさわぎでなくなり、大分川の河川工事でグラウンドの大半をつぶして堤防を作ったのである。小野廉市長のときだった。いまそのあとは日銀舎宅が占めている。中島五条を大分川堤防に突き当たる手前に、コンクリート製のでっかい門柱がうらぶれた姿で立っている。あれがもと市営グラウンド入り口。その門柱のうしろに文部大臣松田源治書の「記念碑」という文字を刻んだ碑がある。コンクリートの台にグラウンド建設のいわれを記した銅版があったが、戦争中にはぎ取られたものらしい。そのあとに鉄骨がのぞいていて無残である。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

## デジタルブック版「大分今昔」 第七章 ●中島かいわい

2007年9月28日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

### 著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。  
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。